慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	増井光蔵・傍島省三訳 ラグナー・ヌルクセ原著 国際資本移動論
Sub Title	
Author	岩田, 仞
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.10 (1939. 10) ,p.1399(127)- 1406(134)
JaLC DOI	10.14991/001.19391001-0127
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19391001-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Klocke; Buchführung und Bilanzen der G.m.b.H.

有限責任會社經營に就いて參考書たるものは尙左の如きを擧げ得る。

Fränkel, F.: Die Gesellschaft mit beschränkter Haftung. Tubingen 1915.
Liebel: Die wirtschaftliche Struktur der GmbH. Betriebs- und finanzwirtschaftliche Forschungen, Heft 55.
Hachenburg, M.: Kommentar Zum Gesetz betr. die GmbH. Leip. 1927
Baumbach; Gesetz der GmbH. München 1936.
Bauer: J. Geschaftführung und Aufsichtsrat bei GmbH.
Klausing, F.: GmbH.—Gesetz Berl. 1936.
Schmalenbach: Finanzierung. 6 auf Leip. 1937.
Molitor E.: Gesellschaften mit beschränkter Haftung. in Handwörterb. d. Staatwiss. IV B.
Beck, C.: Buchhaltungs wesen der GmbH.
Gain et Delaisi: Les Société a Responsibilité Limitée. Paris 1937.
佐々　穆　日本有限會社法論(十三年四月)
田中耕太郎　改正商法及有限會社法概說(十四年四月)
大橋　光雄　有限會社法(十四年一月)
千野　國丸　有限會社法解說(十三年四月)
佐々　穆　有限責任會社法論(八年)
大村　聖友　有限會社實務必携(十四年五月)

增井光藏・傍島省三譯「ラグナー・ヌルクセ原著「國際資本移動論」
松井榮一譯「キンドウルバーガー原著「國際短期資本移動論」

岩田仞

最近、國際資本移動に關する二著が、相次いで飜譯された。一つは增井光藏、傍島省三の二氏に依るヌルクセの「國際資本移動論」であり、他の一つは松井榮一氏に依るキンドウルバーガーの「國際短期資本移動論」である。兩著はイヴェルセンの「國際資本移動論」と共に、資本移動に關する最近の代表的論作であつて、その飜譯が刊行された事は我が學界を粹益する所少くないものと信ずる。

我が學界に於ける貿易理論の發展は、最近かなり活潑を極め、特にその分野の擴大に於て著しい。從來貿易理論は極く狹隘な範圍に踢蹐してゐた。即ちその中心的課題は、比較生產費說を廻る貿易理論史上の二大潮流たる古典派理論と近代理論の對立の問題であつた。之は誠に尤な事であつて、貿易理論史を繙く者には、右の問題が貿易理論の發展にとつて如何に重要な契機をなしてゐたかを容易に理解し得やう。又少くとも貿易理論の研究に手を染めんとする者は、先づ右の問題に對して何等かの解決を示す必要があり、斯くしてこそ始めてその後の發展が可能となるのである。我が學界も亦久しく其處に停滯してゐた。

併し乍ら更に翻つて考へて見るに、古典派理論對近代理論の間に於ける比較生產費說是非の問題は、決して貿易理論本來の中心的課題ではない。その歸する所は、嘗つて熱烈に繰返された所の價格理論上に於ける價値論爭の蒸返しであり、その一派生物に過ぎないのである。從つて貿易理論の狹い枠内で之を解決せんとする事は、本末を顚倒してゐる。即ち價格理論の基礎付けとして價値論を必要とするや否や、又必要とするならば如何なる價値論なりやが解決されて始めて決定される問題なのである。勿論學說史上は價値論に於ける重要な論爭地として國際價格現象が採り上げられたのではあるが、問題の中心は飽く迄一般價格理論—價値論にある。從つて貿易理論が右の問題に携る限り、その發展は常に一般價格理論—價値論より一歩遲れ、その補足をなすに止る。

然るに貿易理論研究に於ける最近の傾向は、右の如き事情から脫却して、新しい分野の開拓に向つて進んでゐる。その特に顯著なるものは、ダンピング論を中心とした國際價格の個別經濟的乃至は經營學的分析への傾向と、國際資本移動論を中心とした國際金融機構分析への傾向とである。

ダンピング論は本稿とは關係がないから之を論外に置くとするも、國際資本移動論は決して從來の貿易理論と離れて獨自に成立したものではない。イヴェルセンの詳細な學說史的研究を待つ迄もなく、國際資本移動論は古くから貿易理論と密接な關聯の下に論ぜられてきた。勿論國際間の資本移動を否定し、然もその前提から貿易理論を建設せんとした古典學派にあつては、眞の意味の國際資本移動論は見出されない。併し乍ら彼等が論じた所の、貿易收支以外の原因（特に貢納、援助金、賠償金支拂等）に依つて國際收支の均衡が破壞された場合の均衡回復過程並びにその貿易收支への影響に關する說明は明かに國際資本移動の萠芽的理論である。かの有名なソーントン對リカード、リカード對マルサスの論爭は此處に改めて紹介する迄もないであらう。更に貿易理論の近代化に伴つて、國際資本移動の研究は急速に發展した。而してその發展の重要な契機をなすものは大戰に依る賠償金問題であり、獨逸の賠償金支拂に關するケーンズ對オーリンのトランスファー論爭に端を發してゐる。大戰に依るヴェルサユ條約は第二次世界大戰を惹起せしめ不幸なる效果を齎すに至つたが、大戰に依る賠償金問題は學問の世界に國際資本移動論の發展と云ふ建設的な效果を齎したのである。それは兎も角として、右のオーリン並びにハーバラーに依つて、國際資本移動論はトランスファー理論として貿易理論上重要な地位が與へられるに至つた。併しその場合論ぜられた事は、主として賠償金支拂と云ふ經濟外的原因に依つて破られた國際收支均衡の回復過程、トランスファー機構に關してであつて、それが本來の國際資本移動過程の分析に迄移されたのはイヴェルセン、ヌルクセを待つて始めて行はれたのである。更に國際短期資本移動のみを採り出して之を詳論したのがキンドゥルバーガーである。飜譯せられたヌルクセ、キンドゥルバーガーの二著は右の如き學說史上意義深き書である。然らば兩著は如何なる內容を持つてゐるか。次に簡單な紹介を示さう。

× × ×

國際資本移動論が貿易理論の近代化に伴つて發展せる事は前述せる如くである。蓋し古典派理論に於ては、その基本原理たる比較生產費說が勞働と資本が國際間には移動せざる事を前提せるが故である。從つてヌルクセも「古典派的構想から離れ去つた」オーリンの理論、或ひは「近代的衣服を着けた」ハーバラーの比較生產費說から、「吾々の問題に到る道もこゝに開かれてある。」と云ふ。彼は先づ國際資本移動に於ける資本が、「物的資本」ではなくして「資本的購買力」であると云ふ初步的解說を與へた後、「財の流れこそは疑もなく資本移轉に伴ふ—無條件に必然的なる事柄ではないにしても尙ほ本質的なる事柄なのである。」と云ふ中心的課題の說明をする。更に資本と勞働をも

含めて生産諸要因の移動と財の移動との間に存する諸關係の分析に移る。その場合近代理論を保持する彼が分配論上に於ける限界生産力說を基礎とする事は云ふ迄もない。而してその結論としては、資本の移動と勞働の移動との間に正と負の兩樣の相關々係があると云ふ二重の合則性を認め、財貨の移動と生産諸要因の移動とは相互に他の相對的價格を平衡化せしめる作用を有ち、「財貨の國際的移動性の減退は、他の事情にして等しき限り、資本移動に對する刺戟を高める、と云ふのは正しい。が、それは又同時に國際的資本移轉の現實的可能性を制限しもする。」と主張する。

かくて國際的資本移轉機構の研究に移るのであるが、國際收支の均衡攪亂に關しては古くから國際貿易理論の側から十分に論議された。併し、前述せる如く古典派的理論に於てはトランスファー機構を過度に單純化し、更に凶作とか賠償金支拂の如き非經濟外的原因により惹起する場合のみを取扱ふ。それに對してヌルクセは、譯者が凡例に於て述べられてる如く、「個々の資本所有者の利潤追求なる私的自發的動機に發する國際資本移動過程に即して解析するのを本筋とする。」即ち本來の國際資本移動機構を問題とするのである。その場合金本位下と紙幣本位下の二者に分つて論じる。金本位下に於ける資本移動に於ては、通常行はれて居る資本移動→爲替相場變動→金移動→物價變動→商品移動→金移動の全過程の說明を與へ、更に爲替相場變動後生ずる摩擦的現象として商品の受信國への移動と投機的性質を帶びた短期資本の授信國への移動とを擧げる。又紙幣本位下に於ては、資本移動が行はれる期間中爲替相場が從前の購買力比率から乖離せざるを得ず、從つて資本移動の續く限り授信國の本位の過小評價が與へられて商品の形を以てする資本移轉を成就せしめる輸出プレミアムが生ずる事を說明する。從つてその場合受信國が爲替ダンピング防壓の意味で輸入阻止を企てる事が矛盾であるとなすのである。最後に、「金に拘束せられざる國際紙幣本位制の下に於ては、各國內に於ける貨幣狀態が完全に安定してゐる場合にも尙、資本の國家間移動性は著しく制限せられざるを得ぬ」事情を解明する。

次にトランスファーと價格變動の問題であるが、彼は古典派理論がその過程を不當に單純化せる事を批判し、購買力移轉に伴ふ商品價格の個別的變動乃至相對的變動を仔細に研究する。此の點に付ては既にイヴェルセンが古典派理論と近代理論とを對立せしめて詳細に論じた所であるが、ヌルクセは更に之を一層精密化したのである。その詳細を此處に紹介する紙數を持たないが、資本移動即ち購買力移動が行はれる際に、購買力配分の變化より生ずる各種各樣の場合を檢討する。更に古典派理論の中心問題であつた所の資本移動に依る國際間の實質的交換比率の變化にも論及する。又金本位下に於て資本移動の結果右の「交換比率が受資國に有利に變化する場合にのみ授資國より受資國への移動が起る」事、金本位と金爲替本位の場合の差異、紙幣本位下に於ける爲替相場と購買力平價との關係等にも觸れる。

資本移動の原因と結果に付ては、生産技術の變化と消費財需要の變動、生産の「垂直的」構造の變化、トランスファーと資本構造等の節を設けて、それ〴〵の說明を與へる。其處で特に興味ある問題は、「世界市場に於ける原料品と完成品との價格關係の變動、之より生ずる關係諸國の實質的交換比率の推移を、原料國への資本移動と關聯せしめて研究する事」である。其處に個別經濟的原因に依つて生ずる資本移動と云ふ原因が、關係諸國の實質的交換比率と云ふ國民經濟的結果に如何なる影響を與へるかと云ふ問題を解決する手段を見出す事が出來やう。

次に資本移動の關係諸國に對する景氣的效果に論及する。ヌルクセは此の點に於ても資本移動論に新分野を開拓したと云ひ得る。從つてその論述が未だ充分ならざる感なしとしないが、其處には檢討を要する幾多の問題を含ん

である。

最後に國際資本流通の現象形態を長期資本と短期資本とに區別して說明する。

× × ×

ヌルクセが國際資本移動の全般に亙つて論じるに對して、キンドウルバーガーは特に短期資本に付て取扱ふ。最近資本移動論が顯著なる發展を遂げたが、短期資本移動はその場合に付隨的に述べられてゐるに止まり、未だ充分に解明せられてゐない。譯者も云はれるやうに、キンドウルバーガーの著はその意味で大なる評價を與へらるべきであらう。

彼は先づ國際短期資本の類型を論じ、イヴルセン及びヌルクセの分類を拒否した後、(1)均衡化短期資本移動、(2)投機的移動、(3)收益移動、(4)自主的移動に區分する。著者自身も之等の區分線が理論的に明確でない事を告白してゐるが、特に(3)と(4)の間に於てその感が深い。第二に短期資本移動と金移動との一般的關係を描寫した後、資本移動を信用手段の見地から、(一)外國貨幣、(二)外國爲替、(三)對外投資の三者に分類する。

次に國際短期資本移動に伴つて生ずるインフレーション的並びにデフレーション的影響を說明する。短期資本移動が銀行殘高或は外國貨幣に起る場合特に顯著であるが、外國爲替移動の形態をとり殊に對外投資となる場合は或る制約が與へられる事を付言する。更に國際短期資本移動の貨幣供給及び國民所得に及ぼす第二次的影響として短期資本市場の利子步合、準備率、第二次的支拂準備、信用政策等の考察をも行ふ。

以上の如き豫備的考察を行つた後、第二篇としてトランスファー機構論に移る。本篇は本書の最も光彩ある部分であり、著者が需要の屈伸性なる概念を導入せる點は譯者も云はれる如く注目に値する。彼は借入國に於けるインフレーション及び貸付國に於けるデフレーションの程度が、國際需要の變動に依存する事を强調し、貨幣的變動の次の如き三段階に區分して分析する。即ち(一)借手が借入を受取る段階、(二)借入手取金の一部又は全部を借入國に於て費すことから生ずる借入國に於ける所得增加の段階、(三)貨幣供給に於ける任意の第一次的擴張より生ずる借入國に於ける所得增加の段階。更に進んで金本位及び紙幣本位下のトランスファー機構に於ける短期資本の役割に論及する。其處に於て解明される事は、短期資本の國際移動が長期資本を相殺する限りに於て資本の實質的トランスファーの必要を減少するに役立つに過ぎないと云ふ從來行はれてた見解を否定し、寧ろ短期資本移動が實質的トランスファーを容易ならしめる事、更にそれが貸付國及び借入國のインフレーション及びデフレーションを促進する事からして短期資本移動が國際調整手段として全く同一部類に入れらるべき事である。

第三篇は短期資本移動の原因に當てられてゐる。其處では先づ、國際收支が國民的貨幣所得にインフレーション的影響もデフレーション的影響も及ぼさない時に外國爲替市場及び國際收支の均衡が得られ、爲替が不均衡になり通貨が過大或ひは過小評價される場合に國際短期資本の移動が發生すると云ふ一般的な見解が與へられてゐる。更に景氣變動現象に伴つて生ずる國際短期資本移動と異常的な資本逃避の場合を說明する。

最後に國內信用政策と國際收支の關係、及び國際收支の不均衡を增大する短期資本移動の影響を抑制すべき諸方策を論じる。更に附錄として國際短期資本移動に關する統計が示されてゐる。

以上の外に譯者の親切から、著者の一論文「國際貿易理論に於ける需要の屈伸性」が付加されてゐる。それによつて著者のトランスファー理論に重要な役割を持つ「需要の屈伸性」をより深く理解する事が出來る。

× × ×

「國際資本移動論」、「國際短期資本移動論」

兩書の內容は大體以上の如くであるが、原書を對照する餘裕なく、たゞ譯書に付て之を紹介したに止まる。元來國際金融現象に關す術語は複雜であるにも拘らず、譯書に依り充分に之を理解し得るのは、一に譯者研鑽の結果であると考へる。

前號（第三十三卷第九號）目次

◉公債論の三つの型　永田清

◉古代及び中世の西洋に於ける地理學
——その史的素描——　小島榮次

◉古版經濟書解題
佛蘭西共和國第三年版『マリー・ジャン・アントアーン・コンドルセー遺著『人類精神進歩の歴史畫下圖』　高橋誠一郎

◉Oswald Dutch, Germany's Next Aims, 1939.　山本登

◉シュトリィダァ教授の「アウグスブルク經濟史」
Das reiche Augsburg: Ausgewählte Aufsätze Jakob Strieders zur Augsburger und süddeutschen Wirtschaftsgeschichte des 15. und 16. Jahrhunderts. Herausgegeben von Heinz Friedrich Deininger. (München, 1938.)　高村象平

◉園田一龜著「韃靼漂流記の研究」　野村兼太郎

●一冊定價金五拾錢
●半ケ年分金貳圓九拾錢
●一ケ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘
郵稅共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十四年九月廿五日印刷納本
昭和十四年十月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第三十三卷　第十號

編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所

發賣元　東京市芝區三田二丁目一番地　丸善株式會社三田出張所　電話三田(45)一一九二六番　一一九二七番　振替口座東京一一八五二番

●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會　振替口座　慶應義塾　芝區三田二ノ二　東京一八二〇四番